

イギリス人の戦争墓巡礼と追悼文化 War Grave Pilgrimages and the British Commemoration Culture

吉田正広
Yoshida Masahiro

The purpose of this paper is to consider the meanings of pilgrimages to the Commonwealth War Graves in Europe and Asia by the British and to locate battlefield pilgrimages and tours in the context of the cultural climate of commemoration in Britain. After the World War I, many people traveled to the war graves and former battlefields. These activities were characteristic features of the religious beliefs of the contemporary British who did not go to church on Sunday regularly.

はじめに

第一次世界大戦において、イギリス政府は戦没兵士の遺体を現地に埋葬することを決定し、以後、戦没兵士の墓地の維持整備が世界的規模で行われている。この戦没者墓地（「英連邦戦死者墓地」）への遺族の訪問は、「戦争墓巡礼」 War Grave Pilgrimage と規定され、「世俗巡礼」の一つの形態として巡礼研究において注目されている¹⁾。また、近年の研究は、戦間期の「戦場巡礼」 Battlefield Pilgrimage や「戦場観光」 Battlefield Tourism を、これまでの戦没者の追悼や戦争記念碑に関わる研究とのつながりの中に位置づけている²⁾。このイギリス人の「戦争墓巡礼」は、巡礼の本質を考える上で重要な手がかりを与えると同時に、戦争記念碑に関わる歴史研究とつなげることで、「記憶の場」研究との関連性をも見いだすことができる³⁾。戦争墓地は、「記憶の場」として強烈な「記憶」を我々に強制しているからである。

本稿では、世界各地に展開する「英連邦戦死者墓地」のうち、ベルギーのイーブルおよびその周辺に点在する墓地群、シンガポールのクランジ英連邦戦死者墓地、横浜英連邦戦死者墓地をとりあげ、「記憶の場」としての墓地の景観を検討するとともに、そこでの「戦争墓巡礼」の実態を紹介し、さらには、現代イギリスにおける幅広い追悼文化について一定の見通しを示しておきたい。

I 英連邦戦死者墓地の景観—芝生、白い墓石、庭師—

世界中に展開する英連邦戦死者墓地は、一部の墓石の違いを除けば、共通の景観を呈している。緑の芝生の墓地に整然と並ぶ白い墓石、墓石の横に並ぶバラやラベンダー、ポピーなどの植木、剣と十字架を組み合わせた「犠牲の十字架」、教会の祭壇を連想させる「追憶の石」などである。墓石については、アジアの一部で、地震を考慮してか、異なったものが見られる。また、墓地を整備する「庭師」の姿があり、特にアジアでは、現地の人々が日中炎天下の中、芝や庭木の手入れをする姿が印象的である。

フランスからベルギーにかけてのフランドル地方には多くの戦死者墓地が点在する。特にベルギーのイーブルは、第一次世界大戦の西部戦線における最大の激戦地であった。「イーブル・サリアン」と呼ばれ、前線においてドイツ側に大きく張り出している場所であった。ここでの戦闘は多数の死者を出したことで有名である。当然、イギリス人の戦争墓巡礼および戦場ツアーの最大の目的地である。近年でも、畑から遺骨が発見されて、新たな戦死者墓地が建設されてもいる。

今日、これらの多数の英連邦戦死者墓地はフランドル地方の農村地帯の風景の一部となっている。フランスのリールからベルギーのイーブルへ向かうベルギー国鉄の車窓からは、田園地帯の中に大小様々な規模の英連邦戦死者墓地が点在している様子が見られる（図1）。田園地帯だけでなく、

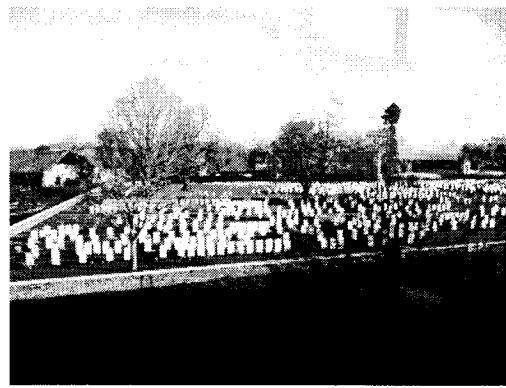


図1 イーブルに向かう列車の車窓より

イーブルの都市内にもいくつか英連邦戦死者墓地がある。図2は、かつての塁壁の一部が保存されている近くにあるランパート墓地（「ランパート」とは防御のための城壁のこと）を堀の対岸、すなわち、かつての塁壁の外側から見た構図であり、緑の芝生の上に規則正しく並ぶ均一の白い墓石と「犠牲の十字架」という典型的な景観である。この図では水面に映る様子が特に美しい。図3は、イーブル・レゼボワール墓地で、この墓地もかつての都市の城壁内部に位置する。緑の芝生に並ぶ墓石、犠牲の十字架に加え、ここには「追憶の石」が典型的な形で置かれている。図4は、イーブル郊外の農村地帯にあるタイン・コット墓地であるが、ここはドイツ軍との激戦地に当たり、かつてのドイツ軍の要塞であった。この墓地の「犠牲の十字架」は、そのドイツ軍のトーチカの上に建っている。この墓地には資料館が併設され、ドイツ軍の要塞を示す写真など、様々な資料が展示されている。このように戦死者墓地は、イーブル市内、さらにはかつての戦場であったイーブル近郊の農村地帯にも、共通の景観を呈しているのである。

アジアに展開する英連邦戦死者墓地のほとんどは、日本軍との戦闘で、あるいは捕虜として死亡した兵士たちのものである。

シンガポールのクランジ英連邦戦死者墓地は第二次世界大戦中における日本軍との激戦地にあり、日本軍との戦闘で死亡した英連邦兵士の墓地である。かつてイギリス領であったこの景観は、ヨーロッパとほぼ同じで、芝生の敷き詰められた傾斜地に、イギリスから運ばれた白い墓石が規則正しく建ち並び、犠牲の十字架と飛行機の羽根を模った行方不明兵士の名前の刻まれた記念碑が印象的である。墓地の入り口には「追憶の石」が置かれており、ヨーロッパの戦死者墓地と基本的には同じである。ただ、墓地の裏手に回ると、イギリス軍とともに戦ったインド系の兵士や水夫などの墓石が並んでいるが、これらには違う石材が使われている。また、マレー系の「庭師」による手入れがなされていた（図5）。図6は墓を一つ一つ熱心に見ていた夫婦の写真である。この後、墓地にはバスでやってきた「白人」のツアーの一団が到着した。

さて、日本にも英連邦戦死者墓地がある。横浜市の保土ヶ谷の高台には横浜英連邦戦死者墓地がある。この場所は戦前、「保土ヶ谷児童遊園地」と呼ばれた横浜市の児童生徒のための体育施設であり、戦時中は練兵場となり、丘の上に横浜の「忠魂碑」が市民の寄付で建てられていた。戦後の占領下での接收を経て、サンフランシスコ講和条約の付帯状況で永久貸与され、現在に至っている。この墓地は、戦争中に日本各地で死亡した英連邦の戦争捕虜の遺体を戦後ここに集めて埋葬した場所である。「犠牲の十字架」と緑の芝生に整然と並ぶ墓碑が特徴的であるが、ここはヨーロッパやシンガポールのものとは異なっている。地震に対する対策とも言われている。ここでも、現地人、すなわち日本人の「庭師」による行き届い



図2 ランパート墓地



図3 イーブル・レゼボワール墓地



図4 タイン・コット墓地

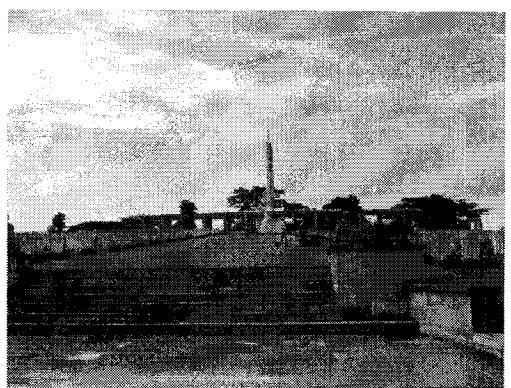


図5 クランジ墓地

た手入れが行われている（図7）。

横浜の景観は、墓石以外にも、ヨーロッパやシンガポールに比べるとかなり異なっている。犠牲の十字架はあっても、「追憶の石」はなく、イギリス区画はかつての「児童遊園地」にあった陸上競技場に相当するため、全体としては楕円形をしている。「横浜火葬記念館」という火葬された遺骨を安置した建物もあり、こここの特徴となっている（図8）。また、うつそうとした緑の木々の中に、オーストラリア区画、ニュージーランド区画、カナダ区画、インド区画が点在し、近くに行かなければ区画の存在に気づかないほどである。また、小高い丘の上には戦後区画が設けられ、第二次世界大戦後に死亡したイギリス人の墓地も置かれている。この戦後区画に当たる小高い丘の上のかなり広い区画は、戦争中「横浜市忠魂碑」が置かれ、毎年招魂祭が行われていた場所でもある。その意味で、英連邦戦死者墓地の置かれた場所は、「記憶」が重層的に存在する「記憶の場」である。

以上のように、英連邦戦死者墓地は、芝生の上に整然と並ぶ規格化された墓石、十字架と剣を組み合わせた「犠牲の十字架」、さらに「追憶の石」という一般的特徴を持つ。また、現地の人々を雇用した「庭師」による入念な手入れが行われている。特に墓石が並ぶ箇所と芝生の境目がまっすぐに伸びた様子は大変印象的である。この庭師も墓地の景観の一部となっていると言えよう。ただし、かつての英連邦加盟諸国以外では、墓石など若干の景観の違いがある。タイのカンチャナブリの墓地も写真を見る限り、墓石は横浜のものと同じである。また、横浜の墓地のように、「保土ヶ谷児童遊園地」という過去の景観に影響を受けている箇所もある。

II 第一次世界大戦後の戦争墓巡礼



図6 クランジ墓地の巡礼者？

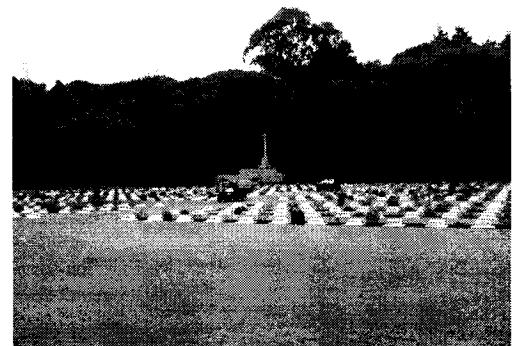


図7 横浜英連邦戦死者墓地

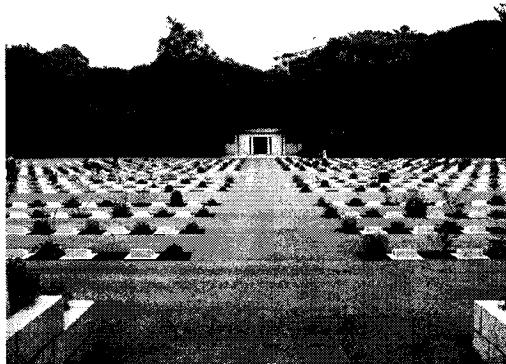


図8 横浜火葬記念館

イギリス人戦争墓地の誕生には、戦死者の遺体は現地で埋葬するという第一次世界大戦中のイギリス政府の決定と、フェビアン・ウェナーに始まる戦場での墓地の整備事業の二つが前提として存在する。赤十字の活動から始まったウェナーの墓地整備活動は、「帝国戦争墓委員会」 Imperial War Grave Commission として公認され、やがて「英連邦戦争墓委員会」 Commonwealth War Grave Commission に改称されて、今日に至っている。同組織は世界中の英連邦戦争墓および戦争記念碑の維持管理を行っている。横浜の英連邦戦死者墓地もその一部として管理されている。

フェビアン・ウェナーの活動は、戦場で臨時に埋葬された墓地について、埋葬者の氏名と場所を記録するというものであった。これらの臨時に埋葬された遺体は戦後大きな墓地に改葬された。改葬当初は木製の十字架が埋葬者の氏名と所属部隊と階級を示すプレートとともに立てられていたが、やがて規格化された墓石に代えられ、墓地の整備が進んでいく。

このように戦没者の墓が戦場にあるということは、戦死者の遺族や恋人は国内では墓に祈ることができないことを意味した。そのことによって、戦後、イギリス人がかつての戦場を訪れて、戦死者の墓や行方不明兵士の名前が刻まれた戦争記念碑を訪問して祈りを捧げる「戦争墓巡礼」が行われることになる。

まず、戦死した息子の墓を探し求めたキプリングや、フランスでの休暇中に婚約者および自分の弟の墓を訪れた様子を感動的に描いたヴェラ・ブリテン⁴がいる。キプリングは、この戦後直後の「戦争墓巡礼」の様子を、短編小説「庭師」の中で感動的に描いている。これらの「巡礼」は自ら大陸に旅行できる中産階級以上の場

合である。それより下層で、自ら大陸に旅行できない場合には、例えば、宗教団体である「聖バルバナ協会」が労働者階級の遺族に対して戦争墓への巡礼を組織した。同協会は1923年に274名の「巡礼者」で構成される「イープル巡礼」を組織し、1926年の「ガリポリ巡礼」には、274名の巡礼者が参加した⁵⁾。

次は元兵士や退役軍人の組織による「巡礼」である。この場合には「戦場巡礼」ということになる。元兵士の戦場への巡礼は、仲間の兵士の墓を訪れるだけでなく、つらい過去と直面し、それを克服するという面も持つ。1928年8月3日から8日にかけて約7000名が参加した英国退役軍人協会British Legionの「巡礼」が有名である。



図9 1919年のイープル（絵はがき）

このほか、一般の人々の参加が可能な「戦場ツアー」も一般化した。戦争末期にはすでに戦場への旅行者の存在が認められたとされるが、1918年11月11日休戦後は、様々な形での戦場への旅行が活発化した。1919年には、早くもトマス・クックの戦場ツアーが組織化された。図9は、筆者がイープルの土産物店で購入した絵はがきである。絵はがきには「イープル1919年」との説明しかないが、1919年当時のイープルの中心街の様子を示す貴重な写真である。写真の右端のバスの側面には“EXCURSIONS to the Battle Field”と書かれている。このバスは明らかに「戦場ツアー」のためのバスである。背後に見える廃墟は纖維会館で、かつてはイープルのシンボルであり、その後復元され、現在に至っている。この写真の中央には赤十字のマークのついたトラックが止まっている。人々はきちんとした身なりでまわりを散策し、トラック左手には子供の姿も見える。さらにその左手には放置された大砲の砲架に座ってくつろいでいる制服姿の人々も見える。さらにその向こうには別のトラックが止まり、荷台には人々が乗っている。これも戦場ツアーのための交通機関であることが推察できよう。以上の様子からこの写真は、1919年という戦後すぐのイープルでの「戦場ツアー」の様子を移した写真であることは確実であり、おそらく、この写真はトマス・クックのツアーの様子を写した写真と考えて間違いないまい。現在ではイープルはイープル周辺の戦争墓地や関連施設を巡る戦場ツアーの基地になっているが、当時はイープルの街そのものが戦場ツアーの対象であったことも確認できよう。

ところで、戦争墓巡礼を典型的に示す短編小説として、キプリングの『庭師』（1926年）がある。キプリング自身が息子を第一次世界大戦で行方不明のまま亡くして、戦場の墓を探しまわるという経験を持っている。この短編小説の主人公は、中年の独身女性ヘレン・テュレルである。彼女には兄弟のジョージ・テュレルがあり、彼は若い頃から何かと家族を悩ましていたが、インド警察の警部となり、結婚して息子が生まれるとまもなく死亡した。ジョージの息子がマイケル・テュレルで、結果的に主人公のヘレンによって養育されることに

なる。マイケルが10歳の頃に、自らの境遇をめぐってヘレンと口論となつた。その後、マイケルはパブリック・スクールへ通い、オクスフォード大への進学を準備していた。そんな折に第一次世界大戦が勃発し、マイケルは志願兵として戦場へ赴くことになった。当初、マイケルはノーフォークやスコットランドなど国内に配備されたが、フランス、パ・ド・カレー県のルースに配備され、イーブル・サリアンでの戦闘により、マイケルは戦死した。

マイケルの死によってヘレンは混乱する。しかし、時間の経過とともに落ち着き、戦後は村の帰還兵士の世話や、村の戦争記念碑設置委員会で活躍する。ヘレンは、マイケルの埋葬地に関する情報を受け取る。それには「ハーゲンゼーレ第三軍事墓地」（ハーゲンゼーレは架空の地名）と記入され、墓の位置を示すアルファベットと番号がかされた文字で記載されていた。ヘレンは知らされたマイケルの墓をめざしてフランドル地方へ旅行する。フランドルの現地の事務所でヘレンはある女性と出会う。彼女は、取り乱して、息子がどこで死亡し、どこに埋葬されたかがわからないと係員に迫っていた。旅行会社クックの旅行チケットが有効期限切れになつてしまふとも述べていた。ヘレンは現地のホテルでも別の体験をする。レストランで食事をしているときに別の女性と知り合う。彼女は、知り合いから頼まれて戦死者の墓を訪れて写真を撮り、手紙を添えて送る商売をしていると告げる。ヘレンが一人で部屋に引き上げたあと、先ほどの女性はヘレンの部屋に押しかけて、実は彼女自身訪れたかったことを告白するのである。

翌朝、ヘレンはマイケルが埋葬された墓地を訪問する。そこでは腰の高さまで伸びた雑草と木製の仮の十字架がその中に立っていた。彼女はマイケルの墓を探すが、どうなつてゐるのかまったく不明であった。その時ヘレンは向こうに新しい墓石が設置され、植木を移植する庭師の存在に気づく。

並んだ墓石の背後に一人の男が跪いていた。明らかに庭師であった。彼は、苗木を柔らかい土に移植していた。ヘレンは手に書類を持ったまま庭師に近づいて行った。庭師は彼女が近づくと立ち上がり、前触れも挨拶もなく、「誰を捜しているのかい」と訪ねた。「マイケル・テュレル中尉、甥です」とヘレンは、一言ずつゆっくりと答えた。彼女は人生において何度も経験したように。男は視線をあげ、限りない思いやりを持って彼女を見た。すぐに彼は植えたばかりの苗木から、むき出しの黒い十字架の方に視線を移した。「私について来なさい。息子さんが横たわっているところを教えてあげよう」。ヘレンが墓地を去る時、彼女は最後に振り返った。遠くには、その男が自分の植えた若木にかがみ込んでいるのが見えた。ヘレンは、彼が庭師であると考えながら、そこを去つていった。

小説のこの最後の場面でキプリングは、庭師を介在させることで、「戦争墓巡礼」におけるヘレンの救いを感動的に描いていると言えよう。第一次世界大戦に関わる戦争墓巡礼や戦場ツアーは、1920年代に始まり、第二次世界大戦が始まる1930年代後半まで続いた。

III 現代の戦争墓巡礼・戦場ツアー

ここでは、現代における戦争墓巡礼や戦場ツアーの盛況をもたらした様々な要因について考えるとともに、これまで筆者が体験した現代の「戦場ツアー」および「戦争墓巡礼」の痕跡について紹介したい。

図10は筆者が2007年11月12日から14日にかけてイーブルを調査したとき、実際にツアーに参加したツアーエンターテイナー・ザ・トップ・ツアーズのパンフレットである。このツアーエンターテイナーの店舗は、イーブルのメニンゲート（行方不明兵士の名前が刻まれた戦争記念碑で、毎日夕方8時には「ラスト・ポスト」という追悼ラッパの演奏が行われている）のすぐ近くにあり、書店として戦争関連図書や戦争関連グッズを販売している。このパンフレットによると、イーブル周辺の戦場ツアーは午前中4時間、午後3時間半の2つの半日ツアーが用意され、一人35ユーロ（約4200円）の料金である。ルートとしては午前中のツアーが代表的なもので、筆者が体験したのも基本的には午前中のコースを基にしたものであった。左上の写真は、タイン・コット墓地の一部である。またこのイーブルのツアーエンターテイナーは、北フランスのソンムやヴィミーへの一日ツアーも用意している。ソンムが一人75ユーロ、ヴィミーが一人65ユーロで、4人未満の場合は追加料金が加算されることになっているが、これは、7人乗りのミニバンでツアーが組まれることと関連していると思われる。パンフレットの左下は、北フランスのソンム県にあるラ・チェンズの設計によるシープヴァル記念碑で、行方不明兵士の名前が刻まれている。

また右下は、「カナダ・ナショナル・ヴィミー・メモリアル」である。

イーブルにはほかにも複数の戦場ツアーカー会社があり、また、北フランスにも多数のツアーカー会社が存在する。先のツアーカー会社の案内のドライバーのレスは、元イギリスの小学校校長であり、店舗の女性は横浜にも行ったことがあるとのことであった。今思えば、横浜へは先に紹介した英連邦戦死者墓地へ行ったであろうことは、現在では想像がつく。

この会社のツアーに参加したときには、別のグループがたくさん訪れていた。どのツアーカー会社もほぼ同じ経路をたどるため、イーブル郊外の墓地を回った時には、様々なグループに遭遇した。私と同じミニバンのツアーもあれば、大型バスで回る小・中学生の集団、自家用車で回るグループと様々であった。かなりの雨の中のツアーであったが、タイン・コット墓地にはたくさんの「巡礼者」や「戦場ツアー」のメンバーがいた。駐車場にはイギリスだけでなく、ヨーロッパ各国のナンバープレートを付けたバスが駐車していた。

さて、筆者は横浜英連邦戦死者墓地を年に2~3回ほど機会を見つけて訪れているが、その機会の中で、墓地の記帳所に「戦争墓巡礼」の痕跡を見つけた。

それは図11と図12のようなリーフレットである。2つのリーフレットを見ることによって、「戦争墓巡礼」のあり方を確認しておこう。

一つは、ここに埋葬されているウィルフレッド・グリーヴズの墓への「戦争墓巡礼」の記録である。記録の左上（写真の左下）には、ウィルフレッド・グリーヴズは、アルバートとガーシャ・グリーヴズの息子であり、ジャック・グリーヴズの兄（または弟）であることが明記され、その横にはウィルフレッド・グリーヴズが日本軍の捕虜になったことを報じた新聞記事のコピーと、おそらく横浜に最初に埋葬された時の木製の十字架の写真が貼られている。その下には、英國空軍

階級（一等兵 Aircraftman 1st Class）と所属部隊（英國空軍義勇予備軍 Royal Air Force Volunteer Reserve）、死亡日時（1943年3月4日23歳）が手書きで記されている。

日付はない「日本軍捕虜」と題する新聞記事には、日本軍捕虜となった知らせだけでなく、1940年10月に英國空軍に加わり、1941年8月に海外に派遣されたこと、年齢が23歳であり、入隊前はフェランティ社（イギリスの電子機器メーカー）の変圧器部門で働いていたこと、北チャダートン中学校とチャダートン・グラマー・スクールを卒業したことが記されている。死亡が23歳であるとすると、この記事も1943年の記事と言うことにな

We offer twice daily tours of the Ypres salient

Am tour 9.30 to 1.30
Essex Farm, Langemark, Vancouver Corner, Passchendaele, Tyne Cot, Polygon Wood and Sanctuary Wood.

Em tour 2.00 to 5.30
Hill 60/Tyne Cot, Bayewald, Pool of Peace, Irish Peace Park, Plugstreet, Messines and Hyde Park Corner.

Tours cost 35 per person
Bespoke tours: price subject to arrangement - enquire at bookshop

OverTheTopTours.Belgium

We also offer all day tours to the Somme and Vimy Ridge
These tours cover all the major sites such as Pozieres, Lochnagar, Thiepval, Ulster Tower and Beaumont Hamel on the Somme and Grange tunnels, Vimy memorial, Notre Dame de Lorette, Nivelle St Vaast.

Somme: 75 per person
Vimy: 65 per person
(There is a surcharge for less than 4 persons)
Visit our shop to book tours and browse our collection of WWI books

All tours leave from our bookshop: 41 Meensestraat (at the Menin Gate) 037 424320
Tours can be booked at the shop or via our website: www.overthetoptours.be or phone Andre on 0472 348747 or Les on 0473 394873

図10 戦場ツアーカー会社のパンフレット

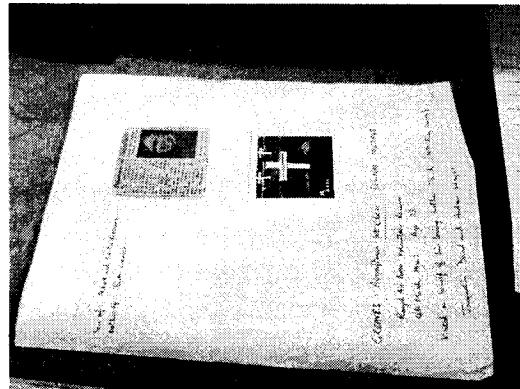


図11 墓参記録1（横浜墓地）

り、死亡した年に日本軍捕虜となったことが報じられたことになる。なお、ウィルフレッド・グリーヴズは、尾道にある向島捕虜収容所跡のメモリアルプレートに「1067845 AC2 Wilfred Greaves 4 Mar. 1943」⁷⁾と記されているので、ここで死亡したことが分かる。また、POW研究会作成のデータベースでは、広島の向島収容所で「栄養失調、脚気、腎炎」で「1943年3月4日22歳」で死亡したことになっている⁸⁾。なお、出身地チャーチタウンはグレーター・マン彻スターに属するオールダム自治区にある。かつては綿工業地帯として栄えた場所である。

記録の最後には、「彼の愛する弟（あるいは兄）ジャック・グリーヴズのために、ジャクリーヌ、デイヴィッドおよびアンドリュー・ライトの三人が、2009年7月30日に訪問した」ことが記されている。

もう一つは、ゴードン・ベルの墓地訪問の記録である（図12）。これには、「香港退役軍人記念協会」とあり、「カナダ在住の家族から」という記述があり、本人の写真にポピーの造花が添えられている。これはむしろ、退役軍人組織による「戦争墓巡礼」と考えられよう。POW研究会のデータベースによると、ゴードン・ベルは、カナダのウィニペグ歩兵連隊 *Winnipeg Grenadiers* に所属し、1945年6月6日に京都大江山捕虜収容所で慢性大腸炎のために、24歳で死亡し、カナダ・オーストラリア区に埋葬されている⁹⁾。



図12 墓参記録2（横浜墓地）

IV 現代イギリスの追悼文化

現代のイギリスでは、5月8日の「ヨーロッパ戦勝記念日」Victory in Europe Day、8月15日の「対日戦勝記念日」Victory over Japan Day、11月11日の直近の日曜日の「戦没者追悼日曜日」Remembrance Sunday が戦没者の追悼を行う記念日となっている。特に戦没者追悼日曜日には全国で様々な式典が行われている。その中に位置するのが、ロンドンのホワイトホールにあるセノタフでの王室、政府を中心とした式典である。また、そのほか全国各地の地域コミュニティーの戦没者追悼記念碑前で式典が行われ、企業や学校、駅などにある戦没者追悼記念碑でも式典が行われている。そして、戦争以外の様々な事故や事件の犠牲者への追悼と巡礼も行われている。例えば、ロンドンの地下鉄テロの犠牲者への追悼、ダイアナ妃の命日における追悼、1989年にヒルズバラー競技場で死亡したリバプールFCのサポーターへの追悼など、様々である。

また、近年では、死者の埋葬の困難化と火葬の一般化（現在では死者の70%以上）への抵抗感の結果、各地に自然葬地が出現している。これは、自然保護と埋葬とを結合して、埋葬に際して植樹された樹木が生長して、将来的にはその地が森林として再生することを期待するものである¹⁰⁾。これと戦没者追悼とを結び付けたものに、全国戦没者追悼植物園 The National Memorial Arboretum がある。これは、戦没者追悼と自然保護を結合したものである。ここには「極東通り」Far East Walk が設けられ、日本軍による「捕虜虐待」の様子を再現した「場」も設けられている¹¹⁾。

以上のような現代イギリスの追悼文化の中で、「戦争墓巡礼」と「戦場巡礼」は、戦場ツアーと結びついてますます発展しているように見える。

1) Tony Walter, "War Grave Pilgrimage", in Ian Reader and Tony Walter,(ed.), *Pilgrimage in Popular Culture*, Basingstoke, 1993.

2) David W. Lloyd, *Battlefield Tourism: Pilgrimage and the Commemoration of the Great War in Britain, Australia and Canada, 1919-1939*, Oxford, 1998.

3) 「記憶の場」研究において、フランスの各地にある戦争記念碑についてプロストの研究がある。Antoine Prost, "Monuments to the Dead", in Pierre Nora, *Realms of Memory*, Vol. II, Traditions, New York, 1992.

4) Vera Brittain, *Testament of Youth: An Autobiographical Study of the Years 1900-1925*, 1933.

5) Lloyd, *op. cit.*, pp.

6) Brian Harding, *Keeping Faith: the History of the Royal British Legion*, Barnsley, South Yorkshire, 2001.

- 7) http://www.megiya.com/html/horyo_shuyojo.html (2011年2月12日)。
- 8) 江浦洋&POW研究会作成の死亡捕虜リスト「英連邦戦死者墓地 イギリス区」
http://www.powresearch.jp/jp/pdf_j/cemetery/cemetery_grave_british_j.pdf (2011年2月12日)。
- 9) Ibid.
- 10) 武田史朗『イギリス自然葬地とランドスケープ』昭和堂、2008年。
- 11) David Childs, *Growing Remembrance : the Story of the National Memorial Arboretum*, Barnsley, 2008.



デビット・モートン氏報告



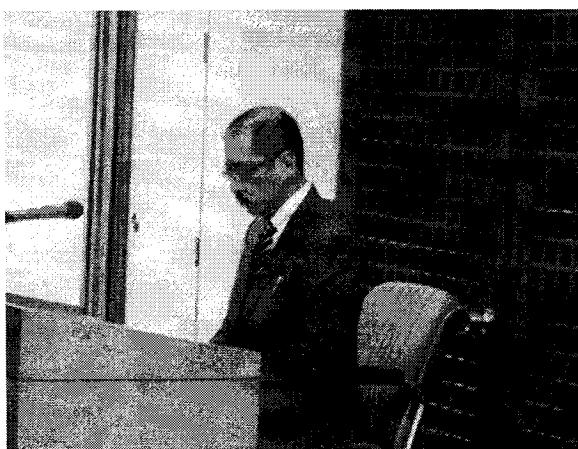
加藤好文氏報告



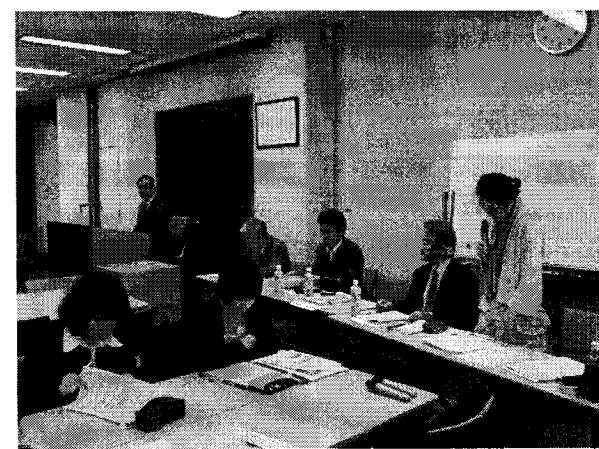
山代宏道氏報告



吉田正広氏報告



小幡氏コメント



コメントを受けての討論